マツ枯れと歩んだ道

松保護士　渋木　一也

私は農薬メーカーに勤務し、農薬を使用したマツ枯れ防除を推進する立場にいます。しかし、マツ枯れ防除を行ううえで、農薬の使用が優先されるものではないと考えています。私は昭和60年に神奈川県川崎市の農薬会社に就職しました。会社では毎年5月からマツ枯れ予防のため全国のマツ林へ薬剤の地上散布に出掛けていました。当時は薬剤散布が主体の時代で、ようやく樹幹注入剤が発売された頃でした。1回の施用による残効が1年または2年で、加圧注入はなく、すべてが自然注入でした。現在のように、残効5年以上の少量薬剤を加圧注入する方法や、注入孔へノズルを挿入する際、入れにくいと感じること（ドリル刃で樹幹を穿孔した注入孔に、薬剤のノズルが密着するように作られているため）も、過去の教訓から生まれたマツを守る技術なのです。

『松保護士の手引き 改訂2版』51ページにはマツ枯損量の推移を示すグラフが掲載されています。1950年頃と1975年頃に100万m^3に達した時期があり、1950年頃は、枯マツが生活燃料として毎日の生活の中で炊事、風呂炊き、暖房用燃料として重宝されました。1975年になると生活燃料は電気やガスに変わり、枯マツは需要がなくなりました。すなわち、カミキリの幼虫が潜む枝を拾い集める人手がなくなってしまいました。

さて、農薬は農林水産大臣の審査を受け合格したものだけが個別の登録番号で農薬登録されます。農薬の性能（成分表示、適用内容、使用上の注意点等）は包装容器に記載されていますので、ご使用前に御一読下さい。字が小さく読めない時や不明なことは、ご使用前に購入店舗か製造会社にお問い合わせ下さい。

農薬は厳しい審査を受け市販されていますが、期待する効果を出すには次のようにそれなりの手間がかかります。

①予防散布剤：対象のマツが朝露や前夜の降雨で濡れていると効果が低下します。木を揺すって水滴が落ちないことを確かめて下さい。

②樹幹注入剤：施工マツがマツノザイセンチュウに感染していないことが前提です。松脂チェックを、施工するすべてのマツで行い、感染の疑いがあれば線虫検査を行います。

③伐倒駆除：マツノマダラカミキリ幼虫とマツノザイセンチュウの二者同時に殺虫できる効率的な防除方法です。幼虫は直径3cm程度の細い枝にも生息しますので、残さず拾い集め処理します。

・9月頃迄に枯れたマツはGPSで位置を特定するなどして確実に駆除します。被害材を放置すると遠方からマツノマダラカミキリを呼び寄せてしまいます。

・くん蒸薬剤は、容器では液体ですが枯マツに散布すると徐々にガス化し、有効成分が浸透して材内の線虫や幼虫を殺虫します。シートの被覆密閉度が殺虫効果に大きく関与します。

・くん蒸用シートは再利用せず、新品の1枚ものを使用します。シートの裾は必ず覆土します。薬剤のガス化には温度が関係しますので、気温10℃以下の低温時期は2週間以上のくん蒸を行います。

マツ枯れは、マツ材線虫病だけでなく、他の病虫害によっても針葉の異常や葉色の変化がみられますが、集団枯損する時にはマツ材線虫病が疑われます。その威力は、一旦感染し病徴が現れる頃にはマツ全体に症状が進み治療ができません。

マツ枯れ被害対策に従事する人なら切実に感じていることですが、マツ枯れに対する世間の認識は地域や場所によって差があります。マツの存在が地域の宝だという地域もあれば、維持管理面から伐採の要望が出ている地域もあります。成長に伴って枝が拡張し家を傷めることや台風で木が倒壊する危険を危惧することもあります。一方で、沿岸部や遮蔽物の少ない田園地帯では、家屋や田畑を囲むような防風林が住民の生活を守っています。ゴルフ場の防球林もプレーヤー保護やプレー戦略上必要です。有名な庭園でもマツは欠かせません。

マツを残す活動は、薬剤を用いた防除だけでなく、住民の方にマツと触れあう機会を設けていくことも大切です。正しい知識と強い信念をもつ松保護士の活躍に期待いたします。